



# 夢の人

---

---

---

kou

## 始まりはタクシーから

---

「楽器屋を襲わない？」

十三年ぶりに遭った友人に、コンビニに行かない、という気軽さで衝撃的かつ斬新な問いかけをタクシーの中でされ、間宮太一は言葉に詰まる。既にタクシーは五日市街道に差し掛かり、タクシードライバーがアクセルを強く踏み込む。

「お客さん、決断のときだよ」

バックミラー越しに手入れの行き届いた髭を蓄えたタクシードライバーが追随する。

いや、その、と間宮は尚も言葉に詰まるが、「選択肢が提示されたら、決断するしかない」と十三年ぶりに遭った友人である神崎瞬が淀みなく言った。

「決断不足の人間に最も効果的な方法は、急かすことだ」とタクシードライバー。

「それにしても運転手、素敵なセリフを放つな。たしかに決断不足とカルシウム不足の人間は急かすに限る」

神崎は首を縦に二度振った。が、間宮には全くその意味がわからなかった。

「決断不足の友人を持つ悲しき男よ」とタクシードライバーが威厳のある声を車内に響かせ、「その理由を教えてやんなよ」と表情を見なくても最後のセリフを放った後に口元が綻んでいるだろう、ことは間宮にも容易に想像がついた。それほどまでに、余裕と、この場を楽しんでいる陽気さが漂っていた。

「わからないのか？」と神崎。

「わかるわけがない」と間宮。

やれやれ、と神崎が狭い車内で両手を挙げ、「決断不足な人間を急かし、期限を定めさせれば決断せざるをえなくなる。さらにカルシウム不足な人間は、苛立ちやすい。それは科学的根拠もあり、大方的を得ていることは人生教訓からも学んでいる。彼ら彼女らに対する対処法は、とりあえず糖分をいち早く摂取させ、機嫌をとる、に限る」前方を見据え目を細めた。

「ザッツ・ライト」

タクシードライバーが声を大にして叫び、ラジオを点けた。

「ビートルズ！」

間宮は思わず声を出す。

「変わらないな」と神崎。

「いい曲だ」とタクシードライバー。

「間違いないです」

間宮は断言しラジオから流れる音に耳を澄ます。曲は間宮がビートルズで最も好きな、『I've Just Seen A Face』。初恋の女性が好きだった曲。

「通称『夢の人』、か。夢を見るために、楽器屋を襲わないか？」神崎は再度言った。

## 偶然か必然か出会う

---

新高円寺駅から徒歩十五分の場所に間宮の住むマンションはある。築年数は並であり、そこから自転車で新宿まで通勤している。会社の帰り道、「間宮！」と声を掛けられ、振り向けばクールな表情を崩す事のない中学の同級生である神崎がそこにはいた。軽く世間話をしている最中に間宮の自転車は何かの因果かパンクした。近くの有料駐輪場に自転車を止め、タクシーに乗り現在に至る。

## 楽器屋手前の思考

「この辺りに楽器屋ありますか？」と神崎がタクシードライバーに当然のように訊き、「もちろん。既に向かっている」とタクシードライバーが当然のように応える。

「おい神崎！君は帰らなくていいのか？奥さんだって心配するだろ」

間宮は腕時計を確認しながら言った。さらにいえば神崎が結婚してる、というのは憶測だ。彼の左手薬指に指輪が嵌められているからだ。

「彼女なら心配ない。もう眠っている」

その時の神崎はクールな表情というよりは、どこか遠くを見つめ何かに思いを馳せる表情だった。間宮は何か言おうとしたが、

「楽器屋といえば、ここしかない。ほら着いた」タクシードライバーが遮った。

「準備は整った。楽器屋を襲撃し、『楽譜』を奪取するでしょう」

「ほお、それは目的が明確でわかりやすい」このタクシードライバーは神崎と妙に気が合うというか、調子がいいというか、間宮は不思議と困惑と疑念が入り交じる。

「楽譜なら買えばいいじゃないか。今はネットで手軽に買える時代だろ」

間宮は財布から夏目漱石を三枚取り出し、タクシードライバーに渡した。

夏目漱石を受け取る際、「手軽じゃ意味がないんだろ？」とタクシードライバーが独り言のように呟いた。

「その通り。簡便さは人を墮落させる。幾分か手の込んだことをして『楽譜』を奪取すべきだ」と神崎が断定した。

「俺の二分の程度しか生きてねえ割には良い事いうじゃねえか若僧」とタクシードライバーはラジオを消し、唾を飲み込む音を響かせ、「お前、簡便さの末路を知ってるか？」と間宮に鋭い目を向けた。

末路？

その単語が出る度に思い起こすことは、死、だ。生からの死。今あるものが朽ち果てる末路。間宮が答えを提示する前に、

「思考の停止だ。人は考えることから退職する」とタクシードライバーは言い添えた。退職、という言い回しに間宮は苦笑をこらえる。なかなかウィットに飛んだドライバーだと、改めて彼は思う。

神崎はドアを開け、外に出た。それに続き間宮も外に出る。タクシーは走り去り、排気ガスの匂いがかろうじてタクシードライバーの存在を認識させた。

「さて、武器は持ったか？」

そう言う神崎の手には、百円ライターが握られていた。それとスーツの胸ポケットに万年筆。この状況が未だにうまく飲み込めない間宮は、武器を持たなければいけない状況なのではないか、と半ば察し鞆から買ったばかりのペットボトルの水を取り出す。

「これでいいか？」と間宮が真剣な表情で訊き、「喉が渴いたら飲め」と神崎が言った。

神崎は目の前にある楽器屋へ向かう。古びた外観で立て掛けられている看板は錆びれていた。

「廃業してる雰囲気がある」

間宮は悪びれず言い辺りを見回す。空は漆黒の闇に包まれ、楽器屋クールをも包んでいる。その光景は中世の魔女の館を想起させ、ぶるっと全身が震えた。

「さて、問題の楽譜を入手するでしょう」神崎は正面扉に向かい把手を掴んだ。

「神崎！鍵は？」

「鍵は開いているはずだ。そういう運命に僕らは導かれている」

神崎は口角をきゅっと上げ、それと同時に扉の把手を捻った。

扉が開いた。

偶然と運命の差とは一体なんなのだろう、偶然と偶然の積み重ねが運命なのか、はたまた運命が偶然を導くのか、神崎との再開、そして楽器屋襲撃、そんなことを思いながら間宮は神崎の後に続いた。

## 夢の人へ

---

神崎がライターで店内を照らした。十畳ほどに楽器が所狭しと並べられている。問題の楽譜は正面から向かって左手に無造作に積まれていた。幾分か埃が被っている。

「ここは営業しているのだろうか？」

間宮が疑問を口にした。すると、

「してるぞ、ぬ、盗人ども」

震えた声が背後から聞こえた。間宮は振り向き、白髪の初老の男が帚という古典的な武器を持って待ち構えていた。

「いや、違うんです。僕らはただ……」間宮は言い訳を考えたが即座に言葉が出ない。

「勝手に入り込んで、ち、ち、違うんではないだろ」

「変わりませんね」と神崎が初老の男に振り向いた。「そのどもり癖。お義父さん」

「しゅ、瞬君、か」と男は帚を投げ捨て神崎に抱きつき、頬ずりをした。

「楽譜を奪取しに来ました」

神崎は初老の男の抱擁を解いた。

「神崎、これはどういうことだ」

間宮は神崎と初老の男を見比べ訊いた。

「一年前に妻が事故で亡くなったんだ。ちょうど今日が一周忌であり、彼女が好きだった、ビートルズの『I've Just Seen A Face』の楽譜を奪取し、一晩中アコギを弾こうかなと思ってね」

なるほど、と間宮は納得する。タクシーでの神崎の陰を差した表情に合点がいった。

「しゅ、瞬君は、相変わらず奇想天外なことを考える」

初老の男は言った。

「そうかなあ」と神崎が首を傾げ、「たしかに『襲撃』という言葉はいささか攻撃的だったけど、身内だから僕にとっては『訪問』と同じ意味です」楽譜の束を漁りだした。

「最初から『訪問』って言えばいいじゃないか」と間宮は苦笑まじりにいった。そ、そうだ、と初老の男。

「それじゃ面白くない。『訪問』じゃ間宮は来なかった。『襲撃』という言葉に君は導かれたんだよ」と神崎は一枚の楽譜を手にとり、アコギを一本握り、椅子に座った。チューニングを合わせ、カウントを取った。あっという間の出来事に間宮は心を奪われていた。音が鳴り、寒々しい店内に温度が蓄積され、甘いメロディーが空間を包み込む。『I've Just Seen A Face』が神崎の手によって奏でられる。

「妻は『夢の人』になった。いついつまでも」

その一言が間宮は印象的であり、深密に心の内奥を照らした。